

何を、どこまで訳せるか —My Sister's Keeperの場合—

吉城寺 尚 子

1. はじめに

現代アメリカの人気作家ジョディ・ピコーは2004年、小説 *My Sister's Keeper* を出版した。これはヒットして各国語に翻訳され、また2009年にはアメリカで映画化され、この映画もヒットした。映画 *My Sister's Keeper* は、特に重要な結末部分が原作小説から大きく改変されており、そのことも含めて話題になり、小説が改めて注目され再び売り上げを伸ばす、という現象をもたらした¹。日本では2006年に小説の翻訳が早川書房から出版され、映画は2009年10月に封切り、一般紙でも紹介され、全国で上映された。小説は映画公開に合わせて文庫版が出版された²。

アメリカでも日本でも、映画公開に際しては、生命倫理に関わる重いテーマ、小説の「アクロバティックな終わり方」³、映画における原作の大きな改変への好悪や評価、などが話題になっていたようである⁴。本稿では小説 *My Sister's Keeper* を素材にして「翻訳」の問題について考えたい。翻訳にまつわるさまざまな困難や問題や悲喜劇については、すでに多くの人々が書いているが、筆者は本稿で、*My Sister's Keeper* における二つの翻訳不能なものの例を挙げたいと思う。一つは「タイトル」、もう一つは「印刷書体(typeface)」である。文学や映画や芸術作品のタイトルは、しばしば翻訳困難な場合があり、「意識」されたり、翻訳者や出版社等によって全く別のタイトルがつけられることも珍しくない。印刷書体に至っては、通常は翻訳の守備範囲ではないし、翻訳はできないものである。だが、

注

¹ 小説：Jodi Picoult, *My Sister's Keeper: A Novel*. New York: Atria, 2004. 英語版は2004年4月にアトリア社から初版が出されて以降、ペーパーバック、マスマーケット版などが出版されている。本稿執筆にあたっては、アトリア社のペーパーバック版 (export edition, 2006) を参照した。各国語訳については、2010年11月現在、WorldCat (<http://www.worldcat.org/>) においてヘブライ語、ドイツ語、日本語、スペイン語、中国語、デンマーク語、オランダ語、フィンランド語、フランス語、ギリシア語、クロアチア語、ハンガリー語、イタリア語、韓国語、ポーランド語、ロシア語、スロヴェニア語、スウェーデン語、トルコ語版が確認できる。

映画：Nick Cassavetes (direction and screenplay), Jeremy Leven (screenplay), Jodi Picoult (novel), Cameron Diaz, et al. *My Sister's Keeper*. 2009年6月26日にアメリカ、カナダ、メキシコ、イギリスで封切り。映画上映にあたって再び小説の売り上げが伸びたことは、ピコーが自身のウェブサイト

<http://www.jodipicoult.com/index.html> FAQsの項の「なぜあなたは映画 *My Sister's Keeper* の結末を変更させたのか？」という質問への答の中で、「...しかしながら、映画は私にとって成功だった。なぜなら映画は何十万もの新しい読者を私の本へと導き、本は再びベストセラーとなったのだから。」と語っている (2010年3月更新のFAQsに掲載)。

² 小説の日本語版：ジョディ・ピコー『わたしのなかのあなた』川副智子訳、早川書房、2006年。文庫版：ジョディ・ピコー『私の中のあなた 上』『私の中のあなた 下』川副智子訳、早川書房 (ハヤカワ文庫)、2009年。本稿執筆にあたっては、主として文庫版を参照した。映画は一般公開に先立ち、沢木耕太郎「銀の街から」『朝日新聞』2009年9月8日付朝刊紙面で紹介され、10月9日に封切り。沢木の「銀の街から」は朝日新聞のウェブサイト「どらく」に再録されている (http://doraku.asahi.com/entertainment/movie/review/090916_2.html)。

³ 沢木耕太郎「銀の街から」(注2を参照)。

⁴ たとえばジョディ・ピコーのウェブサイト(注1を参照)FAQsや、同サイトBooksのBook11: *My Sister's Keeper* の項を参照。

タイトルや印刷書体が小説の主題や構造に関わる非常に重要な要素だとしたら、翻訳はそれをどう考え、解決すればよいだろうか。

タイトルと印刷書体の問題に入る前に、小説のプロットと構造を簡単に紹介しておきたい。現代アメリカの一家族が主要な登場人物である。ブライアンとサラ・フィッツジェラルド夫妻の間には、息子ジェシーがいて娘ケイトが生まれるが、ケイトはごく幼少から重い白血病に罹る。父母はケイトを救うために「適合する」子供を意図的に作り、生まれた妹アナは、出生時の臍帯血に始まり、血液、リンパ球、骨髄細胞など、さまざまな「身体の一部」を提供してきた。姉妹が青春期にさしかかったとき、ケイトの腎臓は機能不全に陥り、移植をしなければ確実に死ぬところまで悪化する。アナは姉への腎臓提供を拒絶し、両親に対して訴訟を起こす。元弁護士の母は狂乱してアナと対決し、消防士の父はとまどい、両親の目の届かない兄はとうに家族のはみ出し者になっており、非行に走っている。少壮弁護士のキャンベルには、はした金を持ってやって来た少女の依頼を受けようとする個人的な理由があった。訴訟のためアナの一時的な後見人となったジュリアは、偶然にもキャンベルの昔の恋人だった…。

小説は、「プロローグ」「月曜日」「火曜日」「水曜日」「木曜日」「金曜日」「週末」「月曜日」「火曜日」「水曜日」「木曜日」「エピローグ」の章から成る。各章の扉頁には、さまざまな文献からの短い引用が付されている。

各章は、主要な登場人物が節ごとにかわるがわる一人称で語る形で展開する。各節は短く、ほとんどが数頁から十数頁程度である（小説全体は、ペーパーバック版で 500 頁ある）。話の進行はおおむね時間順だが、ときに語り手が回想するように、昔の出来事が挿入される。例えば最初の「月曜日」の章の場合は、「アナ」「キャンベル」「サラ 1990 年」「ブライアン」の節から成り、基本的には小説出版時の同時代を時間軸としながら、サラの節は十数年前の回想である。そして、この小説には意図的に目次がつけられていない。だが、語り手ごとに異なる印刷書体で印刷されており、ある頁を開いたとき、その部分の語り手が誰であるかは明確に識別できるようになっている。

2. タイトル

My Sister's Keeper とはどういう意味か。My の主体は誰か。Sister とは誰のことか。Keeper とは何をキープする人のことか。小説は、短いプロローグで始まる。「私の最初の記憶の中では、3 歳の私が、自分の姉妹^{シスター}を殺そうとしている。ときどき、この記憶はとても鮮明に蘇り、手の下の枕カバーのむずむずする感じや、掌に押しつけられた彼女の鼻のとんがりを思い出すことができる。彼女はもちろん、抗うこともできなかったけれど、やっぱりうまくいかなかった。その夜は家に帰っていた父が通りかかって、彼女を救ったのだ。父は私をベッドまで連れ戻して言った。『こんなことは、決して

起こらなかったんだ。』…」⁵ この「私」が誰のことかは明らかでないが、すぐ次の「月曜日」の章は、アナのモノローグで始まる。「私が小さかった頃、大いに不思議だったのは、赤ちゃんが〈どうやって〉作られるかではなくて、〈なぜ〉作られるかということだった。…私は特殊な目的のために生まれてきたのだ。…」⁶

読者は直感的に、直前のプロローグはアナの幼いときの話だと察する。アナはケイトと歳の近い親密な姉妹だから、病弱なケイトを見守るキーパーである。しかしそれだけではない。アナはケイトのために「作られた子供」であり、本人もそのことを知っている。ものごころのつかないうちから、ケイトのために、アナ自身が無数の注射や手術に耐え、自らの「身体の一部」を提供してきた。アナはケイトの命をつなぐキーパーでもある。

My Sister's Keeper というタイトルと、プロローグの「^{シスター}姉妹殺し未遂」の話から、多くの人が旧約聖書『創世記』のカインとアベル兄弟の話を連想する。アダムとエバの息子カインは農夫となり、カインの弟アベルは羊飼いとなる。神はカインの捧げ物を顧みず、アベルの捧げ物にのみ目を留めたので、カインは怒る。「カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。主はカインに言われた。『お前の弟アベルは、どこにいるのか。』カインは答えた。『知りません。わたしは弟の番人でしょうか。』」⁷ 人類最初のきょうだいである二人は、早くもきょうだいの確執を経験し、やがて人類初の人殺し=きょうだい殺しが起こるのである。

「わたしは弟の番人でしょうか」は、ESV (English Standard Version) 聖書 (2001 年) では “Am I my brother's keeper?” と訳されている。このフレーズは、欽定訳聖書 (1611 年) でも “Am I my brother's keeper?”、ティンダル聖書 (1523 年頃) では “am I my brothers keper?”、ウィクリフ聖書 (1395 年) では “whether Y am the kepere of my brothir?” と訳されており、長らくほぼ同じ形を保って知られてきたことがわかる⁸。“Am I my brother's keeper?” というセンテンスは、そこまで面倒を見たくない、自分の知ったことではない、という意味合いを持ち、驚き、嫌悪、失望を表す慣用語として広く使われている⁹。

アナはケイトのために、注射や手術に耐えねばならなかっただけではない。ケイトの不測の事態に備えるため、アナには家族を離れて旅行をしたり遠方の学校に進学する自由はない。しかも腎臓を提供すれば、アナ自身の将来は大きく制限され、自らも健康の不安を抱えることになる。たとえそのリスクを冒して腎臓を提供したとしても、それでケイトが延命できる保証はどこにもない。タイトルに

⁵ Picoult, *My Sister's Keeper* (see note1), p.3. 以下、当該書からの日本語訳は本稿筆者による。

⁶ Picoult, *My Sister's Keeper* (see note1), p.7-8.

⁷ 日本聖書協会『新共同訳聖書』『創世記』第4章8-9節。

⁸ ESV 聖書は、ESV Bible (<http://www.gnpcb.org/esv/>)、欽定訳聖書は、MLibrary, University of Michigan (<http://quod.lib.umich.edu/k/kjv/>)、ティンダル聖書とウィクリフ聖書は、Wesley Center Online, Northwest Nazarene University (http://wesley.nnu.edu/biblical_studies/tyndale/ ; <http://wesley.nnu.edu/sermons-essays-books/john-wycliffes-translation/>) を参照した。なお、ウルガタ聖書 (405 年) の当該箇所は、“custos fratris mei sum” と訳されている。

⁹ 例えば、*McGraw-Hill Dictionary of American Idioms and Phrasal Verbs* (2002) の “I am not my brother's keeper. and Am I my brother's keeper?” の用例、*Cambridge Idioms Dictionary*; 2nd ed. (2006) の “not be your brother's keeper also not be somebody's keeper” の用例を参照のこと。

は慣用句の「そこまで面倒見なければならないのか」というニュアンスも含まれているのである。

小説は裁判の成り行きを軸に、複数の視点から描かれ、微妙な人間関係をあぶり出しながら進行する。結局、裁判の行方はどうなるか。アナの真意がどうしても確かめられず、彼女の言動に振り回されていたキャンベルは、法廷内で証言台に立った彼女を問いたずす。アナは証言を渋っていたが、腎臓の提供拒否と両親への訴訟は、彼女の意味ではなく、ケイトの懇願によるものだったことをついに告白する。驚愕が引き金となってキャンベルは法廷内で発作を起こし、彼自身の病も周囲の人々に明らかになる。翌日の判決は原告の主張が認められ、アナはキャンベルを代理人として自らの身体に対する決定権を与えられる。

ところが裁判所からの帰途、アナを乗せたキャンベルの車は重大事故に巻き込まれる。消防士で救急隊長でもあるブライアンが交通事故現場に駆けつけると、悲惨な現場で死に瀕した自分の娘に遭遇する。ケイトのいる病院に運び込まれたアナは脳死を告げられ、キャンベルと両親は臓器提供を決心する。

そして「エピローグ」の章は、「ケイト 2010 年」の節のみである。8 年後のケイトが、ここで初めて語り手として登場する。(2004 年の小説出版当時から見れば、近未来の設定である。) ケイトは今や奇跡的に病を克服し、バレエの教師を務めるまでに回復した。ケイトは、家族とキャンベルとジュリアがアナを失った後の、それぞれの「その後」を回想する。だが、このごろはアナの思い出が薄れてきているような気もしてくる。「こんなふうに感じ始めると、私はバスルームでシャツの裾を持ち上げ、手術の白い傷跡に触れる。思い出すのは、最初のうちどうしても、縫合線が彼女の名前を綴っているように思えたことだ。彼女の腎臓が私の中で働き、彼女の血が私の血管を流れていることを思う。どこへ行くときも、わたしは彼女を連れていくのだ。」¹⁰

このエピローグの最後の最後の一文 “I take her with me, wherever I go.” に読者は慄然とし、タイトルの二重の意味に気付くのである。My Sister's Keeper とは、ケイトのことだったのだ。

このタイトルをぴったりの日本語に翻訳することは不可能である。小説の結末を読んだときの深い驚きと感慨は、翻訳されたタイトルでは経験することができない。Keeper を直訳すれば「守る人」「保管者」「後見人」だが、アナがケイトをキープするときの keeper の意味と、ケイトがアナをキープするときの keeper の意味を兼ね備え、且つタイトルにふさわしい語感を持つ訳語はない。さらに問題なのは sister で、「姉」または「妹」と訳さざるを得ないが、どちらかに訳したのでは二重の意味をなさない。「姉または妹」(単数)を指して「姉妹」と言う場合がないわけではないが、多くの場合(そしてこの場合)「姉妹」といえば「姉および妹」(複数)と解釈されてしまうだろう¹¹。そして

¹⁰ Picoult, *My Sister's Keeper* (see note1), p.500.

¹¹ 親族関係を表す言葉と翻訳の問題については、ウンベルト・エーコが翻訳についての著書 *Mouse or Rat?* の中で興味深い例を提示している。英語の nephew, niece, grandchild は、イタリア語ではいずれも nipote である。だが、言語 X は、nephew を Term A(=son of the brother)と Term B(=son of the sister)、niece を Term C(=daughter of the brother)と Term D(=daughter of the sister)、grandchild を Term E(=son or daughter of the son)と Term F(=son or daughter of the daughter)と 6 種に分け得るというのである (Umberto Eco, *Mouse or Rat?: Translation as Negotiation*, London: Phoenix, 2004, p.23-25.)。Nephew, niece, grandchild の場合は、

仮に **sister** と **keeper** がうまく翻訳できたとしても、聖書からの慣用句を暗示するところにはまでは、到底至らないのである。

日本語版は『わたしのなかのあなた』というタイトルで出版された（文庫版は『私の中のあなた』に改題）。難しい制約の中では巧妙に訳されたタイトルだと思う。**My sister** と **keeper** の関係を「あなた」と「私」に置き換えることによって、姉か妹かの明示を回避している。読者はタイトルの「私」がアナを指すのだらうと何となく推測し、タイトルは「アナの心の中のケイト」というほどの意味なのだろうかと何となく思いながら読み進み、結末のところで「私の中のあなた」は文字通りの意味だったのだ、と気づかされる。いやむしろ、気づくことを期待されている¹²。だが、「私」と「あなた」になることによって、タイトルから「姉妹（＝女のきょうだい）」の意味合いは消える。小説の中に「私」は大勢登場するので、タイトルから「ケイトのキーパーとしてのアナ」の意味が薄らいでしまうのは仕方ない。まして、カインとアベルの話や、「そこまで面倒見きれない」重荷としてのきょうだいという含意を求めるのは、ないものねだりというべきだろう。

3. 印刷書体

小説 *My Sister's Keeper* の頁を繰ると、まるで印刷書体の見本帳か何かのように、さまざまな書体の本文が次々に現れる。はじめは少し驚くが、短い節ごとに語り手が次々替わってゆくという、この小説の語りの構造にとっては、面白い効果をあげている。この小説は、ときには同じ日の同じ出来事が、さまざまな立場から描写されてゆくが、本に目次がなく、頁上部の「柱」も左頁に“Jodi Picoult”と右頁に“*My Sister's Keeper*”だけなので、印刷書体の変化は、めまぐるしく替わる語り手を区別するのに都合が良い。

語り手が変わると、まるで声が変わるように印刷書体が変わるのである。それを読むのは興味深い経験であった。印刷書体が変わると始めはやや違和感があるが、2～3 頁も読み進むと、空気のように印刷書体のことは意識にのぼらなくなる。そしてまた語り手が交替すると、印刷書体が変わる。やがて読者は、例えばサラの書体を読むとサラの声が聞こえ、ブライアンの書体を読むとブライアンの目で世界を見るようになるのである。

日本語ではちょうど一語ずつ「甥」「姪」「孫」にあたるが、**uncle** は「伯父」「叔父」、**aunt** は「伯母」「叔母」に分けられる。日本語では **brother** に「兄」「弟」、**sister** に「姉」「妹」の区別があるためである。

¹² 訳者川副智子は文庫版の「訳者あとがき」で「邦題の『私の中のあなた』の意味するところも最後まで読んだあとにもう一回味わっていただければ幸いである。」とわざわざ書いている（『私の中のあなた 下』〈注 2 を参照〉p.360）。小説の結末と、翻訳では弱まってしまったタイトルとの関係に、注目を促す必要があると改めて考えたのかもしれない。

印刷書体のデザインは、登場人物のキャラクターに合わせて選ばれているように見える。ここで、それぞれの登場人物別に使われている印刷書体を図示しておこう（図 1～6）。印刷書体は、セリフ（serif）とサンセリフ（sans-serif）に大別できる。アナ、ブライアン、ジェシーの節はサンセリフの印刷書体、サラ、キャンベル、ジュリアの節はセリフつきの印刷書体が使われている。アナと母親のサラは、裁判によって鋭い対立関係にあるが、二人はサンセリフとセリフの対照的な印刷書体で表されている。困惑しながらもアナに寄り添おうとする父親のブライアンは、アナと似たサンセリフの印刷書体が用いられる。アナの兄ジェシー

もサンセリフだが、比較的新しい雰囲気

の書体で、少々「とんがった」ジェシーのキャラクターに合っている。大学の同窓で元恋人同士だったキャンベルとジュリアは、セリフつきの書体。サラとは法廷で対立関係にあるが、3 人の共通点を敢えて捜せば、皆堅実な法曹の世界に関わっているところが、セリフつきのクラシックな書体を選ばせたのかもしれない。

しばらく読み進んだ読者は、やがて、最大のキーパーソンとも言えるケイトが語り手として出てこないことに気づいてしまうかもしれない。語り手としてのケイトは最後の最後、「エピローグ」の節に現れる。ケイトの書体はイタリックである（図 7）。他の 6 人の書体はいずれも立体なので¹³、「ケイト 2010 年」の節の頁は、異質さが目立っている。そして、ケイトの節で驚きを味わった読者は、同じくイタリックで記された無記名の「プロローグ」を思い出すのである。「私の最初の記憶の中では、3 歳の私が、自分の姉妹を殺そうとしている。…」¹⁴ 自分の姉妹を殺そうとしていた「語り手」は、アナではなくケイトだったのだ。

イタリックに注目しない（できない）読者には、プロローグの語り手が誰なのか、誰だったのかという疑問が沸き起こる。ピコーのウェブサイトの *My Sister's Keeper* 紹介ページには、読書会で話

IT'S RAINING.

The kind of rain that comes down so heavy it sounds like the shower's running, even when you've turned it off. The kind of rain that makes you think of dams and flash floods, arks. The kind of rain that tells you to crawl back into bed, where the sheets haven't lost your body heat, to pretend that

図 1 アナの書体

IT'S RAINING.

Like the day Anna was born—New Year's Eve, and way too warm for that time of year. What should have been snow become a torrential downpour. Ski slopes had to close for Christmas, because all their runs got washed out. Driving to the hospital, with Sara in labor beside me, I could barely see

図 2 ブライアンの書体

IT'S RAINING.

I go outside, and start walking. I head down the street and past the elementary school and through two intersections. I am soaked to the bone in about five minutes flat. That's when I start to run. I run so fast that my lungs start to ache and my legs burn, and finally when I cannot move

図 3 ジェシーの書体

¹³ 例外的に「キャンベル」の節に現れる比較的最長い回想の部分はイタリックで記されている。

¹⁴ Picoult, *My Sister's Keeper* (see note 1), p.3.

し合うための問題点が 16 項目のリストにされているが、その第 1 項が、プロローグの語り手の問題である。「1. *My Sister's Keeper* のプロローグを再読しなさい。語り手は誰ですか？それはあなたが最初に読んだときに思ったのと同じ人物ですか？」¹⁵

プロローグとエピローグは呼応するであろうということに加えて、両者には含まれた本文中の登場人物と書体の関係を考えれば、無記名だったプロローグの語り手が誰かは明白である。両者が本文とは異なる性格を持つ印刷書体のイタリックで記されていることは、プロローグの語り手を示す重要なポイントである。と同時に、プロローグとエピローグだけがイタリックで記されたのでは、作者が周到に準備した構成が目立ちすぎてしまう危険がある。目次を省き、本文の登場人物ごとに印刷書体を変えするという手法は、プロローグとエピローグのイタリックを適度にカムフラージュするという意味でも効果的であるように見える。

ところが、翻訳版はともかくとしても、さまざまな版が複数の出版社から出されている英語版にも、本文の書体が単一なものがある¹⁶。

本稿筆者は、印刷書体の使用法と意味について、作者ピコー氏に次の二つの質問を試みた。1. アトリア社版の印刷書体が登場人物ごとに変えられているのは、あなた自身のアイデアか？ 2. プロローグとエピローグがイタリックで記されていることには、特別な意味があると解釈してよろしいか？

IT'S RAINING.

Not an auspicious beginning, I think. I shuffle my index cards on the table, trying to look more skilled than I actually am. Who was I kidding? I am no lawyer, no professional. I have been nothing more than a mother, and I have not even done a very square job of that.

図4 サラの書体

IT'S RAINING.

When I come out to the living room, Judge has his nose pressed against the plate glass wall that makes up one whole side of the apartment. He whines at the drops that zigzag past him. "You can't get them," I say, patting him on the head. "You can't get to the other side."

図5 キャンベルの書体

JUDGE DESALVO CALLS for a ten-minute break. I put down my knapsack, a Guatemalan weave, and start washing my hands when the door to one of the bathroom stalls opens. Anna comes out, hesitating for just a moment. Then she turns on the tap beside me.

"Hey," I say.

図6 ジュリアの書体

THERE SHOULD BE A STATUTE of limitation on grief. A rule book that says it is all right to wake up crying, but only for a month. That after forty-two days you will no longer turn with your heart racing, certain you have heard her call out your name. That there will be no fine imposed if you feel the need to clean out her desk; take down her artwork from the refrigerator; turn over a

図7 ケイトの書体

¹⁵ ジョディ・ピコーのウェブサイト（注 1 を参照）Books の Book11: *My Sister's Keeper* の項。

¹⁶ 本稿筆者は少なくとも一種類のペーパーバックを、書店の店頭で確認したことがある。ただし出版元がどこであったか失念してしまった。英語版本文書体については、出版が米国の会社に限らないこと、同一出版社からマスマーケット版、大きな文字版など複数出ていること、印刷と販売が別会社になっていることなどにより、全ての確認は困難である。

ピコー氏は第1の問いには直接答えず、第2の問いには「イタリックに関しては、そうです、意味があります。プロローグと最終章は両方ともケイトが書いたものです。」という返信をくれた¹⁷。

最初の問いに返答がなかったということは、本文の印刷書体のヴァリエーションは、作者自身の発案ではなかった可能性が大きい。だが、誰のアイデアだったにしても、一冊の書物としてのこの小説にとって、重要な要素であると本稿筆者は考えている。また、本文の書体にヴァリエーションのない版でも、プロローグとエピローグはイタリックで記されている。少なくともこのイタリックに関しては、作者自身の意図でもあり、プロローグの語り手はケイトだった、という「どんでん返し」の鍵でもあったのだ¹⁸。

日本語版の場合、印刷書体のヴァリエーションはない。本文もプロローグとエピローグも単一の印刷書体で記されている。日本語の印刷書体にも「斜体」はあるが、イタリックとは印象も用法も異なり、単純にイタリックのテキストを斜体に移すというわけにもいかないのだろう。

したがって、日本語版では最初から最後まで同じ字面の紙面が続く。ただし一人称の“T”は日本語の場合さまざまに訳し分けられている。アナは「あたし」、キャンベルは「ぼく」、サラは「わたし」、ブライアンは「わたし」、ジェシーは「おれ」、ジュリアは「わたし」、そしてケイトと無名のプロローグは「わたし」である。したがって、タイトル『わたしのなかのあなた』の「わたし」と「プロローグ」の「わたし」がアナではないことに、注意深い読者なら気がついてしまうし、タイトルの二重性も失われてしまう。文庫版は『私の中のあなた』に改題された。「私」を「あたし」と読むことはないとはいえ、本文では誰も使っていない漢字表記なので、この「私」が誰なのかという疑問をうまくぼかす結果となっている。

“T”の訳し分けに加えて、日本語文庫版は左頁の左上隅の「柱」に、節タイトル（「アナ」「キャンベル」「サラ 一九九〇年」「ブライアン」...）が記されており¹⁹、誰の語りの頁なのか混乱するのを避けている。小さく目立たないとはいえ「ケイト 二〇一〇年」という「柱」も記されていて、せっかくの読者が先に見てしまう危険がないわけではない。

¹⁷ 発信と返信は2010年9月6日。

¹⁸ 読書会のためのガイドの中には、プロローグの語り手とイタリックの関係にはっきり言及しているものがある。NoveList が作成した *My Sister's Keeper* の「ディスカッションのための質問集」(NoveList / EBSCOhost © July, 2006) には、「著者はストーリーを語るために、多数の語り手をどのように用いているか」という問いがあり、本文の印刷書体についての言及はないが、プロローグとエピローグについては「...結局、イタリックで表された語り手が、物語の冒頭と末尾をくくっている。...」と説明している。本稿筆者はこの質問集を、パーウィン公共図書館（イリノイ州）が作成・公開している *My Sister's Keeper by Jodi Picoult, Discussion Resource Guide* (<http://www.berwynlibrary.org/> より検索・ダウンロード可能) によって参照した。当該箇所は、NoveList の読書会ガイド寄稿者 Tess Thompson によって作成された。

¹⁹ 原著の「柱」は、左頁に“Jodi Picoult”、右頁に“*My Sister's Keeper*”である。

4. 結び

日本語文庫版には、原著にないものがあと二つ加えられている。扉頁の前後の、目次と登場人物のリストである。目次は章タイトル（「プロローグ」「月曜日」「火曜日」…「エピローグ」）のみである。すなわち、日本語文庫版の場合、単一の印刷書体、柱に節タイトルを表記、章目次と登場人物リストの追加などが、原著の構成から変更されている点である。原著の目次の欠落、印刷書体のヴァリエーション、イタリックの使用はいずれも小説 *My Sister's Keeper* にとって重要な要素だと本稿筆者は考えるが、いずれも日本語版には踏襲されていない。日本語版の場合、単行本はハヤカワ・ノヴェルズ、文庫本はハヤカワ文庫の一環なので、シリーズとしてフォーマットが統一されていて、印刷書体や構成を変更するには制約があるのかもしれない。

短くて多義的なタイトルの翻訳は、日本語訳でなくても困難である²⁰。まして、印刷書体は「翻訳」など不可能だし、目次や「柱」など本文以外の構成も、通常は翻訳の埒外のものである。しかし、*My Sister's Keeper* の場合は、小説を日本語にするととき何をどこまで訳すことが可能なのか、本文のテキストのみならず何がどこまで訳されるべき「小説」なのか、原著とその翻訳から問われているような、非常に面白い例だったように思う。

²⁰ 日本語以外の翻訳版のタイトルについて、本稿筆者が読めるものに限って紹介すると、フランス語版は *Ma vie pour la tienne*（あなたの〔生の〕ための私の生）、ドイツ語版は *Beim Leben meiner Schwester*（私の姉妹の生に）、オランダ語版は *De tweede dochter*（二番目の娘）、イタリア語版は *La custode di mia sorella*（私の姉妹の守護者）など。直訳に近いのはイタリア語だけである。確認していないが、“Am I my brother's keeper?”にある各国語聖書の当該部分は、それぞれの言語では（日本語と同じく）慣用句となっていないのではないかと推察される。

付記

・映画の原題と日本語タイトルについて

My Sister's Keeper は 2009 年、同じタイトルのもとに映画化されたが、結末が大きく変更されたため、映画のタイトルは半分意味不明になってしまった、と言わざるを得ない。映画のアナは死なず、腎臓移植はされず、奇跡は起こらず、ケイトは助からない。したがって、タイトルに「アナのキーパーとしてのケイト」の意味はない。映画のアナは、腎臓提供の不安は訴えるものの、仲良しの姉妹という面が強調されている。ケイトの出血の処置をかいがいしく行い「私はこういうことが好きなのだから気にしないで」という意味のことを言う場面さえあり、「私は弟の番人なのか？」という聖書の含意とはむしろ反対の印象を抱かされる。映画の結末の改変については、作者も合意しているわけではなく、そのせいか、映画のタイトルは導入部には全く現れない。本篇が終わり、エンディングクレジットが流れたあとで、最後に“*My Sister's Keeper*”と一行表示されるだけである。「原作」とは表示されず、「原作者」の名も書かれていない。ピコーのウェブサイトの *My Sister's Keeper* 紹介ページには、「私の熱烈ファンで、映画を見た皆さんへ」と題する一文が掲載され、「はい、結末が違っていることは知っています。皆さんの中に、たいへん憤慨している方々がいることも知っています。私を変えたのではないのです。原作者は映画に対して何の制御力も持っておらず、〔結末は〕私にとっても受け入れ難いものでした。…どうか、なぜ私が結末を変えたのか、とか、ハリウッドに結末を変え（させた）のか、などとメールで尋ねたりしないでください——私の力の及ぶところではなかったのです。あなたがどう思っているかを、ワーナーブラザーズに教えてください。」と書かれている。

日本では、2006 年に小説の翻訳、2009 年に映画の公開となり、映画の上映に合わせて文庫版が出された。映画の日本語タイトルは小説と同じ『私の中のあなた』だが、映画の結末は原作小説と全く異なるため、原題の含意はもちろんのこと、日本語版翻訳者が「最後まで読んだあとにもう一回味わって」ほしかったタイトルの、結末まで隠されていたもう一つの意味も、完全に宙に浮いてしまった。小説を読まずに映画だけを見た鑑賞者は、このタイトルの意味が理解できなかっただろう。あるいは、家族の思い出の中に残るケイトの姿を象徴した、感傷的なタイトルなのだと思うかもしれない。実は、映画の冒頭と末尾は、数年後の家族が思い出の海岸でケイトをしのぶという、もちろん小説にはない場面で枠取られている。映画の制作者は当然のことながら日本語タイトルを知らないし、日本語翻訳者は映画の制作・公開以前に日本語タイトルをつけたにもかかわらず、偶然にも「変えられたタイトル」は「変えられた映画」にぴったりだった。

・本稿執筆にあたって、多田洋子先生にさまざまなご教示をいただきました。深く感謝申し上げます。

My Sister's Keeper and the Difficulty of Translation

Naoko Kichijoji

Abstract

Jodi Picoult's novel *My Sister's Keeper* was published in Japan in 2006 with the Japanese title *Watashi no naka no anata*. The Japanese title doesn't literally mean "my sister's keeper", so it almost lost the multiple and significant meanings which would have appeared at the very end of the novel.

The novel has multiple first-person narrators, and each narrator is identified by his/her own typeface. The prologue and the epilogue are printed in italics, suggesting that anonymous narrator of the prologue and the narrator of the epilogue are the same person. When the reader finishes reading the epilogue in italics, he/she would realize that the title has another meaning. He/she, remembering that the anonymous prologue was also in italics, would also then realize who its narrator is, and recall the biblical story of Cain and Abel.

The original novel uses multiple typefaces and does not have a table of contents to disguise its surprising ending. On the contrary, the Japanese edition uses a single typeface, a table of chapter titles, a table of characters, and a section title (that is name of a narrator) on the upper left of each page. This indicates that the significant structure of the novel, and, therefore, its intention, has not been translated.